

ノート

保育所における地域子育て支援事業への評価

－母親の育児に関する意識および行動の変化－

野原 真理*¹ 宮城 重二*²

Evaluation of Childrearing Support of Day Nursery in Community

－The Change of Maternal Feelings and Behaviors of Childrearing－

Mari NOHARA*¹ and Shigeji MIYAGI*²

“Hoikusho-kaiho” is one of the childrearing support activities of a day nursery in the community. Using the activity, mothers and children in the community can participate in the regular activity of day nursery. The purpose of this study was to clarify the change in maternal feelings and behaviors of childrearing in the “Hoikusho-kaiho” activity. Sixty-one mothers participated in the activity, completed a questionnaire survey in May and June 2001 and 33 of which were followed afterwards for about six months. Their feelings and behaviors of childrearing before and after the “Hoikusho-kaiho” activity were compared using factor analysis.

The results were as follows. Most of the mothers surveyed had their firstborn child before attending kindergarten.

The scale of maternal feelings and behaviors of childrearing consisted of six factors; feelings of childrearing, flexibility, socialization, social morals, support for independence, and burden of childrearing. Of these factors, the score of socialization factor was significantly higher after than before “Hoikusho-kaiho”

That suggested that “Hoikusho-kaiho” activity in the community could improve socialization of mothers on childrearing.

1. 緒言

保育所は、児童福祉法に基づき“保育に欠ける乳幼児”を保育することを目的とする児童福祉施設である。それゆえ、保育所には長年の活動の中で蓄積されてきた子育てに関する知識や経験と技術がある。

わが国の子育て支援は、当初少子化対策の取り組みであり、延長保育や乳児保育の実施など仕事と子育ての両立支援が主な内容であった¹⁾。しかし、新エンゼルプラン(2002)からは、保育所が地域子育て支援センターの役割をもち、家庭で育児する専業主婦も含めた地域全体に対して、地域子育て支援事業を実施していくことが求められている。この地域子育て支援事業の1つに保育所開放がある。保育所開放は、1994年に全国64ヶ所で施行された「地域子育てモデル事業」に端を発しているが、保育所の日常の保育時間内に、入所児のほかに、周辺地

域の親子に保育所を開放し、遊びや生活を経験する場を提供するものである。参加者は自由に所庭や保育室での遊びの中に入ることができ、日常の保育活動を見ることができる。

この保育所開放に関しては、実践報告が数多く見られている²⁻⁵⁾。その中で、野坂²⁾は、保育所の利用状況として、3歳未満児の親が相談に訪れていること、また、他の親との情報交換ができ、しかも、子どもを安全に遊ばせられる場が得られることで強い満足度を覚えていると述べている。野原⁶⁾は、保育所開放について、母親の参加動機として「同年代の子どもと遊ばせたい」「子どもの遊ばせ方を知りたい」「保育所を知りたい」ということが多かったが、参加後は「子どもの発達や生活がわかる」「職員の接し方が参考になる」など、母親は子どもの発達や接し方などを含む遊び以上のよさを感じていることを指摘しており、さらに、職員が捉えた参加親子の

*¹看護学部, 聖母大学: Faculty of Nursing, Seibo College.*²保健管理学研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Health Administration, Kagawa Nutrition University.

変化では「母親の子どもへの対応が上手になった」など、母親の望ましい行動変容が見られたことを述べている。須永⁷⁾は、入所児と接触し交流する中で、あるいは観察場面で用意されることで、子育てへの学習効果がみられると述べている。

しかし、参加者自身が保育所開放をどのように捉え、そして、保育所開放への参加によって育児に対する意識や行動がどう変化したかに着目した研究はほとんどみられない。

したがって、本研究では、保育所開放に参加することが、母親の育児意識や家庭での育児行動にどのような変化をもたらしたかを明らかにすることを目的とし、今後の子育て支援のあり方を検討した。

2. 対象および方法

1) 地区の概況および保育所開放の状況

今回の対象は、千葉県M市のS保育所である。M市は、人口約47万人の東京のベッドタウンである。S保育所のある地区は、平成17年4月現在人口が43,836人、出生率は8.8（人口千対）、65歳以上人口は10.3%で、一戸建てとアパート・マンションといった集合住宅が混在し転入が多い。全国と比較して高齢化率はそれほど高くなく、都心に通勤する子育て世帯が多い地区である。この地区は昭和50年代に高層マンションが次々建設されるのに伴って計画的なまちづくりが行われたため、道路や公園は整備されているが、公共施設や屋内で遊べる施設が少ない現状である。

S保育所の保育所開放は、毎週火曜日午前9:15~10:45に定例で開催しており、参加親子は所庭や保育室で職員や入所児と一緒にいろいろな遊びを楽しむことができる。また、子育てについての悩みを随時職員に相談することができる。職員は入所児の保育をしながら参加親子と関わっている。月に1回保育士によるミニ講座が開かれ、「手遊び」「紙芝居」「体操」「作って遊ぼう」「ふれあい遊び」など、家に帰っても親子で楽しめる遊びを紹介している。また、年2回開催している「子育てトーク会」では、職員も参加して、子育ての悩みをみんなで話し合ったり、アドバイスをもらうことができる。

2) 対象および方法

今回の対象者は、S保育所の保育所開放に参加している母親61名である。S保育所では保育所開放の参加者を随時受け入れているが、ほとんどの参加者が4月からほぼ1年間の利用期間となっている。

調査は、ベースライン調査（第1回調査）として、利用開始間もない2001年5月~6月に保育所開放に参加した母親61人に調査票を配布し集合法で自己記入してもらい回収した。また、保育所開放の効果をみるために、約半年後の11月下旬に第2回調査を実施した。この第2回調査では、第1回調査者61名のうち住所不備のあった2人を除き、59名に対して郵送・留め置き法で記入して

もらい返送してもらった。回収できたのは33人（55.9%）となった。

調査項目は、母親の育児意識と家庭での育児行動に関する52項目からなる。まず、母親の育児意識については、大日向⁸⁾の母親の役割受容に関する14項目（積極的・肯定的意識7項目と消極的・否定的な意識7項目）、柏木⁹⁾の育児を通した母親の意識変化の認識に関する25項目（柔軟さ、自己抑制、視野の広がり、生きがい・存在感、自己の強さの5因子から構成）から抽出された15項目、野原⁶⁾の保育所開放に参加して得られたメリットとして有意差の見られた3項目を加え32項目とした。また、母親の家庭での育児行動については、堤¹⁰⁾の①子どもの発達に応じた関わり、②しつけに関すること、③子どもとの向き合い方、④子育ての姿勢に関する20項目である。全体として52項目からなる調査票を作成した。

なお、これら52項目の調査項目について、調査前において、S保育所の主要スタッフ2名に対して、保育所開放の参加母親への適正な質問事項であるかについての意見を求め、その内容確認と賛同を得た上で本調査を実施した。

調査票は、第1回調査・第2回調査とも全く同じである（フェイスシートは第1回調査に入れた）。そして、全項目とも「かなり感じる（行動する）」「わりに感じる（行動する）」「少し感じる（行動する）」「あまり感じない（行動しない）」「まったく感じない（行動しない）」の5段階評価とし、前者から5・4・3・2・1点とした。

解析にあたっては、まず52項目個々について、「かなり感じる（行動する）」「わりに感じる（行動する）」「少し感じる（行動する）」を『感じる（行動する）群』、「あまり感じない（行動しない）」「まったく感じない（行動しない）」を『感じない（行動しない）群』の2群として、 χ^2 検定により検討したが、育児意識および行動を体系的に捉えることができなかった。

そこで構造的な検討を加えるために因子分析による検討をした。まず、52項目について、有意な相関があり内容的に類似した項目はまとめ31項目にしばり込んだ。この31項目について、信頼係数（Cronbach's α ）を算出すると「 α 係数=0.58」となり「0.7」以下であった。したがって、1変数ずつの削除によって、数値が最も高くなる変数を1つずつ順次削除していった。その結果、19項目まできた時「 α 係数=0.76」となった。しかも、この19項目について、第1回調査者61名の結果に基づき因子分析（主因子法、バリマックス回転）を施行した結果、抽出された因子に19項目のそれぞれの因子負荷が0.40以上となった。そして、保育所開放参加による育児意識および行動の変化を検討するために、追跡調査者33名について、第1回調査と第2回調査の結果について、各項目の評定得点の平均値および各因子得点の平均値を算出比較し、対応のあるt検定による有意性を検討した。

なお、解析はSPSS11.5J for Windows およびエクセ

ル統計2000で行った。

3. 結 果

1) 対象者の属性

対象者の属性をみると、表1のとおりである。第1回調査対象者61名（対象集団）は、子どもの平均年齢は1歳10ヶ月（±1歳1ヶ月）、母親は現時点で就労していない専業主婦であり、平均年齢は32.2（±4.6）歳だった。連れてくる子どもの約7割が第一子であり、現時点での子どもの人数は1人が67.2%，2人が26.2%，全体の約9割が核家族だった。日中の子どもの世話は、9割以上が母親である。居住年数は5年未満が6割以上を占めて多く、住居形態は集合住宅が8割以上と多い。

また、育児困難時における相談相手（複数回答）は、夫が約8割と最も多く、近隣の友人というのは3割台、近所の人というのは1割以下と低い。

なお、追跡調査者33人の属性についても、第1回調査者全体（対象集団）の結果と有意な差はみられなかった。

2) 育児に関する意識および行動の因子構造

育児に関する意識および行動の19項目について、因子分析の結果をみると、表2のとおりとなった。6因子が抽出された。

第1因子は、「子育ては楽しい」「親であることに充実感を感じる」「子どもを見てると元気づけられる」「い

らいらして子どもに八つ当たりしてしまうことがある」という4項目からなり、第1因子は「育児感に関する因子」と考えられる。

第2因子は、「他人に対して寛大になった」「考えが柔軟になった」「公園や散歩によく連れて行っている」という3項目からなり、柔軟な考え方を基本に、他人への寛大さ、家に閉じこもらない周辺環境の柔軟な受け入れ、いわゆる「柔軟性に関する因子」と考えられる。

第3因子は、「子育てをとおして近所づきあいをする」「子どもの少し先の成長を見通した育児ができる」「子育て仲間や子どもといるのが楽しい」「子どもとからだを使った遊びをしている」という4項目からなる。この因子は、子どもおよび育児を通して、近所づきあい、先への育児の見通し、子育て仲間との交流の楽しさ、子どもとの遊びを利用した身体活動の実践を内容とするものであり、いわゆる「社会性に関する因子」と考えられる。

第4因子は、「あいさつをきちんと教えている」「子どもにことばをとおして分かるように説明する」「順番や『貸して』など社会のルールを教えている」「子どもの発達に応じた生活習慣を身につけさせている」という4項目からなり、子どもへの社会規範の教育およびしつけに関する内容と考えられ、いわゆる「社会規範に関する因子」と解釈できる。

第5因子は、「子どもが自分で決められるようにサポートする」「子どもを『他者』として認めている」という

表1 対象の属性

項 目		対象集団 n=61		追跡集団 n=33	
連れてくる子どもの出生順位 (対象集団の子どもの人数 n=71) (追跡集団の子どもの人数 n=37)	第一子	50	70.5%	28	75.7%
	第二子	17	23.9%	7	18.9%
	第三子	4	5.6%	2	5.4%
複数の子どもを連れてくる母親		10	16.4%	4	12.1%
子どもの平均年齢		22.2±12.1ヶ月 (範囲6～71ヶ月)		22.8±13.6ヶ月 (範囲6～71ヶ月)	
子どもの性別	男	39	55.0%	25	67.6%
	女	32	45.0%	12	32.4%
母親の平均年齢		31.2±4.7歳 (範囲23～44歳)		32.2±4.6歳 (範囲25～44歳)	
父親の平均年齢		31.8±8.5歳 (範囲23～46歳)		33.3±5.0歳 (範囲25～44歳)	
子どもの人数	1人	41	67.2%	24	72.8%
	2人	16	26.2%	8	24.3%
	3人	4	6.6%	1	3.0%
家族形態	核家族	54	91.5%	29	87.9%
	二世帯家族	7	8.5%	4	12.1%
住居形態	一戸建て	9	14.8%	4	12.1%
	集合住宅	52	85.2%	29	87.9%
居住年数5年未満		38	62.3%	22	66.7%
日中の子どもの世話は母親である		58	95.1%	31	93.7%

表2 育児に関する意識および行動の因子構造

質 問 項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
1) 子育ては楽しい	0.825	0.353	-0.198	-0.119	-0.021	0.187
2) 親であることに充実感を感じる	0.664	-0.144	0.437	-0.108	-0.003	-0.012
3) いらいらして子どもに八つ当たりしてしまうことがある	0.595	0.107	-0.122	-0.061	0.012	-0.102
4) 子どもを見ていると元気づけられる	0.520	-0.318	0.329	0.022	0.297	-0.122
5) 他の人に対して寛大である	0.136	0.897	0.340	0.072	-0.083	-0.122
6) 考えが柔軟である	-0.008	0.764	0.014	-0.006	0.082	0.123
7) 公園や散歩によく連れて行っている	0.072	0.622	0.118	0.444	0.123	-0.062
8) 子育てをとおして近所づきあいをする	-0.054	0.185	0.759	0.034	-0.048	-0.086
9) 子どもの少し先の成長を見通した育児ができる	-0.035	0.042	0.558	0.102	0.048	0.098
10) 子育て仲間や子どもといえるのが楽しい	0.054	0.359	0.540	0.126	-0.086	0.098
11) 子どもとからだを使った遊びをしている	0.490	-0.017	0.496	0.262	0.174	-0.013
12) あいさつをきちんと教えている	-0.060	0.154	-0.067	0.729	-0.096	-0.060
13) 子どもにことばをとおして分かるように説明する	-0.202	-0.005	-0.040	0.691	0.393	0.101
14) 順番や「貸して」など社会のルールを教えている	-0.472	0.094	0.224	0.510	0.240	0.155
15) 子どもの発達に応じた生活習慣を身につけさせている	-0.086	-0.087	-0.216	0.404	0.390	-0.130
16) 子どもが自分で決められるようにサポートする	-0.021	-0.056	0.018	-0.001	0.930	0.012
17) 子どもを「他者」として認めている	0.184	0.215	-0.007	0.163	0.660	0.113
18) 関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなっている	-0.097	-0.133	0.156	-0.129	0.098	0.941
19) 親であるがために自分の行動がかなり制約されている	0.002	0.126	-0.056	0.096	-0.012	0.762
因子の寄与率 (%)	12.3	12.2	10.7	9.9	9.7	8.7
累積寄与率 (%)	12.3	24.5	35.2	45.1	54.8	63.5
Cronbach's α 係数	0.69	0.79	0.67	0.74	0.72	0.81
全体の Cronbach's α 係数						0.76

第1因子: 育児感に関する因子

第2因子: 柔軟性に関する因子

第3因子: 社会性に関する因子

注) 質問項目 3) 18) 19) はネガティブ項目として得点を逆転化した。

第4因子: 社会規範に関する因子

第5因子: 自立支援に関する因子

第6因子: 負担感に関する因子

2項目からなり、子どもを1人の人間として認めた対応をすることや子どもの自立を促す距離をおいた関わりと考えられ、「自立支援に関する因子」と解釈できる。

第6因子は、「親であるがために自分の行動がかなり制約されている」「関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなっている」という2項目からなり、これは母親が子育てをする中で感じている「負担感に関する因子」と考えられる。

全体の累積寄与率は63.5%と妥当な高いレベルが得られ、各因子の寄与率は8.7%から12.3%といずれも5%以上であった。しかも、各因子の信頼係数(Cronbach's α 係数)を算出したところ、第1因子が0.69、第2因子が0.79、第3因子が0.67、第4因子が0.74、第5因子が0.72、第6因子が0.81と、ほとんどの因子が約0.7以上と高い信頼係数が得られた。

次に、保育所開放の効果を検討するために、追跡集団の第1回調査と第2回調査の結果から、各項目の評定得点の平均値および各因子得点の平均値を比較すると、表

3のとおりとなった。第1回調査における追跡集団の結果は、全体(対象集団)の結果と比較して、各項目の評定得点の平均値および各因子得点の平均値とも有意差がなかった。

追跡集団の第1回調査と第2回調査の結果をみると、第1因子(育児感に関する因子)、第2因子(柔軟性に関する因子)、第4因子(社会規範に関する因子)、第5因子(自立支援に関する因子)とも、各項目の評定得点の平均値および因子得点の平均値はほとんど同じであり有意差はない。

しかし、第3因子(社会性に関する因子)は、第1回調査に対して第2回調査では、4項目とも評定得点の平均値が高い傾向がみられ、特に「子育てをとおして近所づきあいをする」という項目では3.70から4.09へと有意な増加を示している。しかも、4項目の因子得点の平均値も、8.48から9.04へと有意な増加を示している。

第6因子(負担感に関する因子)では、2項目とも評定得点の平均値が低い傾向がみられるが、有意差はない。

表3 各項目の評定得点の平均値および各因子得点の平均値の比較

質 問 項 目	対象集団 n=61	追跡集団 n=33	
		1 回目	2 回目
第1因子（育児感に関する因子）			
1) 子育ては楽しい	3.93	4.00	4.03
2) 親であることに充実感を感じる	4.10	4.03	3.82
3) いらいらして子どもに八つ当たりしてしまうことがある	2.67	2.70	3.03
4) 子どもを見てると元気づけられる	4.43	4.38	4.24
因子得点の平均値	9.86	9.87	9.87
第2因子（柔軟性に関する因子）			
5) 他人に対して寛大になった	3.43	3.39	3.48
6) 考えが柔軟になった	3.59	3.52	3.42
7) 公園や散歩によく連れて行っている	4.08	4.21	4.27
因子得点の平均値	8.38	8.37	8.39
第3因子（社会性に関する因子）			
8) 子育てをとおして近所づきあいをする	3.52	3.70	4.09*
9) 子どもの少し先の成長を見通した育児ができる	2.98	2.94	3.09
10) 子育て仲間や子どもといのが楽しい	4.02	3.97	4.15
11) 子どもとからだを使った遊びをしている	3.84	3.82	3.97
因子得点の平均値	8.41	8.48	9.04*
第4因子（社会規範に関する因子）			
12) あいさつをきちんと教えている	4.23	4.15	4.12
13) 子どもにことばをとおして分かるように説明する	3.77	3.79	3.85
14) 順番や「貸して」など社会のルールを教えている	4.26	4.06	4.18
15) 子どもの発達に応じた生活習慣を身につけさせている	3.67	3.67	3.58
因子得点の平均値	9.34	9.20	9.24
第5因子（自立支援に関する因子）			
16) 子どもが自分で決められるようにサポートする	3.34	3.36	3.45
17) 子どもを「他者」として認めている	3.48	3.67	3.82
因子得点の平均値	5.40	5.55	5.73
第6因子（負担感に関する因子）			
18) 親であるがために自分の行動がかなり制約されている	2.87	2.61	2.48
19) 関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなっている	3.13	2.88	2.48
因子得点の平均値	5.08	4.64	4.23*

注1) 評定得点：5段階評価（1点：まったく感じない・行動しない，2点：あまり感じない・行動しない
3点：少し感じる・行動する，4点：わりに感じる・行動する，5点：かなり感じる・行動する）

注2) 質問項目 3) 18) 19) はネガティブ項目として得点を逆転した。

* P<0.05

しかし、2項目の因子得点の平均値は、4.64から4.23へと有意な減少を示している。

4. 考 察

1) 対象者の特性

連れてくる子どもは、1歳から2歳が多く、年齢範囲は生後6ヶ月から5歳9ヶ月と入所児と同様に幅広い年齢層であった。

また、母親の平均年齢は31.2±4.7歳であるが、年齢範

囲は23歳から44歳と幅広い年齢層であった。第二子以降の子どもを連れてくる者が3割、また複数の子どもを連れてくる母親が1割以上おり、保育所はどの年齢の子どもも連れてくることができる施設となっていることが示唆される。

さらに、集合住宅に住む者が約9割で、現地区での居住歴は5年未満が6割であった。したがって、保育所開放の参加者は、現地区での居住歴が浅く、集合住宅の居住者が多いことから、友人・近隣の人とのかかわりが長

年この地区に居住している人と比較して希薄な状況が考えられる。育児に困ったときの相談相手として、近所の人を選択した者が1割に満たなかったことは、その1つの裏づけと考えられる。

2) 育児に関する意識および行動の因子構造

育児に関する意識および行動の19項目は6因子で構成されていることが確認された。

第1因子は「育児感に関する因子」であり、親としての自覚を示す因子であると考えられる。

なお、「いらいらして子どもに八つ当たりしてしまうことがある」という項目は育児感に関するネガティブな項目であるが、得点を逆転化したことで第1因子に包含されたと考えられる。

この第1因子に含まれる4項目の評定得点の平均値も因子得点の平均値も、保育所開放の参加前後において有意な変化はなかった。このことは、親としての自覚を持つことは、保育所開放に参加するしないに関わらず、親としての育児の基本的な条件であることを示唆しているものと考えられる。

第2因子は「柔軟性に関する因子」と考えられ、この因子は、親の性格特性を示す因子と考えられ、親の性格特性は育児に関する意識や行動に影響を及ぼす因子として抽出されたものと考えられる。

この第2因子は、第1因子と同様に、項目の評定得点の平均値も因子得点の平均値も、保育所開放の参加前後において有意な変化はなかった。このことは、柔軟性といった親の性格特性は、これまでの長い生活歴の中で培われてきたものであり、保育所開放という短期的な生活体験ではなかなか変容しないことが反映されているものと考えられる。

第3因子は「社会性に関する因子」と考えられたが、この因子は、育児を通して、親自身の社会性が拡大・向上していくことを示すものと考えられる。この第3因子は、保育所開放への参加によって、4項目とも改善の傾向があり、特に「子育てをとおして近所づきあいをする」では有意な改善がみられた。しかも、因子得点の平均値も有意な増加がみられた。このことは、保育所開放が親の社会性を高めることにつながっていることを示していると考えられる。

つまり、参加者は第一子をもつ母親が7割を占めることから、保育所に出向くことが、家庭で母子が孤立してしまいがちな環境から抜け出る機会となっていることが考えられる。また子どもの成長とともに、母子の行動範囲が広がりや、母親のネットワークの広がりを意味するものとも考えられる。保育所開放への参加動機は、「同年代の子どもと遊ばせたい」「子どもの遊ばせ方を知りたい」「保育所を知りたい」というような情報収集型が多いことが指摘されているが⁶⁾、参加後徐々に、他の子どもを見て少し先の成長を見通した育児ができるようになったり、子どもとからだをつかった遊びをしてコミュ

ニケーションをとるようになり、また、子育て仲間や子どもといのが楽しいと感じたりするなど、親の社会性の拡大・向上がみられるようになる。

最近の母親像として、育児に関する情報はたくさんもっているが、子ども時代に遊びの経験が少なく、世代をこえた人づきあいが不足している特性があるといわれている¹¹⁾。このような母親たちに、子どもと一緒にからだを動かす楽しさや、人と交わる楽しさが味わえる保育所の場合が作用していると考えられる。母親は育児を通して社会化のプロセスを踏むといわれるが¹²⁾、保育所開放は母親の社会化の一翼を担っていることが考えられる。

第4因子は「社会規範に関する因子」と考えられるが、この第4因子に含まれる4項目の評定得点の平均値も因子得点の平均値も、保育所開放の参加前後において有意な変化はなかった。このことは、評定得点の平均値がいずれの項目も参加前から比較的高いこととも関連し、多くの母親が、基本的な生活習慣を身につけさせることや良好な友達関係をつくること、集団の中で社会性を身につけさせることなどについて、保育所開放に参加するしないに関わらず、子育ての中で大切にしていることを示唆している。

第5因子は「自立支援に関する因子」といえるが、この第5因子に含まれる2項目の評定得点の平均値も因子得点の平均値も、保育所開放の参加前後において有意な変化はなかった。子どもの自立支援に関する対応は、保育士にとって大切な対応方法とされている¹³⁾。したがって、保育所開放に参加する母親は、保育士のこのような対応を学習し、行動変容への動機づけになるのではないかと考えたが、そのような結果は得られていない。このことは、子どもの自立支援を促す育児のあり方は、重要かつ本来的な親としての関わり方であり、保育士の影響によって、新たに認識させられるものではないことを示唆しているのかもしれない。

第6因子は「負担感に関する因子」と考えられるが、この第6因子は、保育所開放への参加によって、2項目とも有意差はみられなかったが、因子得点の平均値では有意な減少がみられ、育児の負担感は増加していた。

育児への負担感というのは、日常の育児を通して母親自身が主観的に感ずるものであり、週1回の保育所開放への参加によって軽減されにくく、集団の中では支援が困難であることが考えられる。

今回、第1因子から第5因子は、育児に関するポジティブな因子であり、第6因子は逆にネガティブな因子となっていた。

しかし、育児に対するポジティブな意識とネガティブな意識という相反する考え方は、子育て中の母親の意識としては常に共存すると言われている^{8, 10, 15)}。

したがって、子どもの状態や発達段階を見越し、母親の育児への相反する意識や行動といった特徴を考慮した支援のあり方が求められていることが示唆される。

また今回、保育所開放への参加によって、特に第3因

子（社会性に関する因子）と第6因子（負担感に関する因子）において、有意な変化があった。しかし、育児をととして、母子ともに発達・変化することが指摘されており^{16, 17)}、今後は、発達段階に応じて追跡調査や事例研究などを含めたさらなる検討がもとめられている。

さらに、保育所開放という事業は、参加する母親が保育所という「場」を利用するとともに、専門職による「介入」でもあるため、それらを統合した検討、または、「場」と「介入」を区別した検討がもとめられている。

本研究は、家庭で子育てしている専業主婦の母親が、保育所開放に参加することにより、育児に対する意識および行動がどのように変化するかについて明らかにするために実施した。しかし今までにこのような研究はなされておらず妥当性の検討をするのには限界があった。また内容的妥当性の検討を試みたが、今回の対象者が属性、住環境、教育レベル等が類似した対象であったため、検討することができなかった。今後保育所開放に参加していない母親、就業している母親などの調査を進めて比較検討していくことが必要であると考えられる。

5. ま と め

- 1) 地域子育て支援事業の1つである、保育所の保育所開放の参加者は1～2歳の第一子をもつ母親が多く、6か月～5歳9か月までの幅広い年齢層のこどもが利用できる施設となっている。
- 2) 保育所開放参加の母親の育児に関する意識および行動は、「育児感に関する因子」「柔軟性に関する因子」「社会性に関する因子」「社会規範に関する因子」「自立支援に関する因子」「負担感に関する因子」の6因子で構成される。
- 3) 参加母親の育児に関する意識および行動で、保育所開放の参加をととして変化したものは、「社会性に関する因子」とその中の「子育てをととして近所づきあいをする」という項目、そして「負担感に関する因子」である。
- 4) 保育所開放では「社会性に関する因子」により効果がある可能性が示唆される。
- 5) 「負担感に関する因子」は、日常の育児をととして母親自身が主観的に感ずるものであり、週1回の保育所開放への参加によって軽減されにくく、集団の中では支援が困難であることが考えられる。

6. 結 語

今回、保育所開放参加者に対して、育児に関する意識および行動について検討した結果、その構造を6因子で説明することができた。保育所開放への参加前後で変化

のみられなかった、育児感に関する因子、柔軟性に関する因子、社会規範に関する因子、自立支援に関する因子に関しては、保育所開放に参加するしないに関わらず、親が育児をする上で備えている重要かつ本来的な因子であることが示唆された。一方、社会性に関する因子は、参加前後で有意差がみられ、保育所開放の場をととして促進することができる母親への支援内容と考えられる。したがって保育所開放の効果として、母親の社会性の促進に寄与することが示された。

文 献

- 1) 汐見稔幸：国・自治体における子育て支援と保育の施策についての動向。発達，101(26)，2-6（2005）
- 2) 野坂 勉：保育所・子育て支援活動の課題と展望。保育所地域子育て支援活動に関する調査研究報告書，155-161，日本保育協会，東京（1995）
- 3) 濱野一郎，都留民子ほか：地域ネットワークづくりの基盤（0歳から6歳）。73-94，地域における子どもの実態とネットワークづくり，神奈川県社会福祉協議会，福祉研修研究センター，地域ネットワーク研究会，東京（1994）
- 4) 森谷かすみ，堀田芳子ほか：私たちが実践する「地域子育て支援」。7-143，地域の子育て支援，日本保育協会，東京（2000）
- 5) 荻野悟郎，須永 進ほか：子育てに関するアンケートの分析・考察。113-121，地域に開かれた保育所の活動に関する調査研究報告書，日本保育協会，東京（2004）
- 6) 野原真理：地域における保育所の育児支援に果たす役割。276-277，公衆衛生研究，47(3)，東京（1999）
- 7) 須永 進，岡本善之ほか：各実施保育園の報告。2-74，保育所による在宅保育への支援に関する調査研究報告書，日本保育協会，東京（2001）
- 8) 大日向雅美：研究Ⅲ 母性意識の発達変容について。母性の研究，川島書店，東京（1984）
- 9) 柏木恵子，若松素子：「親となること」による人格発達～生涯発達の視点から親を研究する試み～。72-83，発達心理学研究5，東京（1994）
- 10) 堤 マサエ：母性形成過程の社会学的研究。181-203，山梨県立女子短期大学紀要，18，山梨（1985）
- 11) 鯨岡 峻：＜育てられる者＞から＜育てる者＞へ。236-245，日本放送出版協会，東京（2002）
- 12) 船橋恵子，堤 マサエ：母性の社会学。181-185，サイエンス社，東京（1995）
- 13) 保育所保育指針。12-13，日本保育協会，東京（2004）
- 14) 前掲書10) 37-45
- 15) 加藤道代，津田千鶴：育児初期の母親における養育意識・行動の縦断的研究。780-786，小児保健研究，60(6)，東京（2001）
- 16) 柏木恵子，古澤頼雄，宮下考広：発達心理学への招待。186-193，ミネルヴァ書房，東京（1996）
- 17) 前掲書11) 82-127